

二〇二一年度

群馬県立女子大学 文学部 総合教養学科

学校推薦型選抜試験問題

小論文

試験時間は、九十分です。中途退室は認めません。途中で気分が悪くなった場合は、黙って手を上げてください。

問題用紙は五枚です。他に下書き用の白紙が二枚入っています。

解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入してください。

試験開始の合図があるまで表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待ってください。

以下の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

【問い】

食べるという行為に慣習行動がどう関わっているのかをまとめなさい。その上で、本文で取り上げられているもの以外の慣習行動ひとつを例にあげて、その慣習行動を可能にするためには、どのような知識(背景)が必要となるのかについて説明しなさい(1000字以内)。

慣習行動としての食

食は慣習行動のひとつである。

慣習行動とは、何をどうしたらよいか、いちいち考えなくともなめらかにそれができる行動のことを指し、食の他にも、歯磨きや電車の乗車など、私たちの日常は慣習行動であふれている。慣習行動は私たちにとつてあまりにも簡単であるゆえ、なぜそれができるかなど考えることはまずないが、少し立ち止まり、なぜ私たちがこれらを当たり前に行えるかを検討すると、それには込み入った議論が必要となってくる。

まず慣習行動は、膨大な知識に支えられている。たとえば電車に乗る場合、路線、運賃、時刻表についての知識だけでなく、電車とは公共の乗り物であること、それに乗れば目的地の近くまで連れて行ってくれることを知らなければならぬ。またそれだけでなく、時間によっては大変混み合っており、見知らぬ人と身体が触れ合うこともあるということも、電車に乗るための前提知識である。このような前提は際限なく続けることができ、椅子は空洞ではないので座っても破裂することはないとか、電車のドアが目にも止まらぬ速さで閉まり、身体が挟まれることはないとかいった情報も、電車に乗る上で必要な前提知識となる。

このようなことをいちいちあげるのは大変馬鹿らしいことのように思えるが、上述した前提のうち一つでも自明のこととして捉えられなくなったら、たとえば「電車の扉が高

速で閉まり、身体が挟まれて死ぬかもしれない」と考えたなら、電車の乗車は慣習行動として成立しない。アメリカの哲学者であるジョン・サールは、慣習行動の成立に必要なものとなるこのような知識の一群を「背景」(The Background)と名付けた。背景は、ふだんは意識の彼岸にあるため、その行為に際して逐一思い返されることはないが、背景がなければ、その行為は慣習行動として成立しない。慣習行動を支える背景は、地中に埋められた家の土台のように、私たちのありふれた日常を支えているのである。

食の背景とその状況依存性

それでは私たちの食にはどのような背景が存在するだろうか。

まず私たちは、目の前にあるものを脈絡もなく口に入れるわけではない。食べるためにはまず、自分にとって何が食べ物かを見分ける必要がある。

しかし私たちは生まれたときから何が食べ物で、何がそうでないかを知っているわけではなく、この区分は他者から繰り返し教えられることでやっと身につく。海外旅行に行くとか何を食べたらいいかわからなくなるのは、食べ物の選択についての本能が働かなくなったからではなく、食べ物の選択に関する自らの背景と、渡航先の人々のそれがずれているからである。

さらに仮に食べ物の区分に関する知識を持っていたとしても、その入手方法を知らなければ食べることはできない。私たちはスーパーでの食べ物の購入や、レストランでの注文方法など、食べ物の入手に関する細かな知識を獲得しているからこそ食べることができるのであり、それを知らなければ食べるという場にすらたどり着くことができないであろう。

加えて、食を慣習行動として成立させるためには、食べ物の加工・保存についての知識も必要である。食べ物や食材を一瞥すると、それをどうやって保存あるいは変換すべきかを思いつくことができるが、これは私たちが食べ物の加工・変換についての背景を学習しているからであり、これらの知識が生まれながらに備わっていたからではない。レトルトカレーの封を開け、その中身を熱湯の中に流し込むことはレトルトカレーの食べ方と

して誤りであるが、私たちがそうできるのは、レトルトカレーをいかに変換したらよいかを知っているからである。

しかし食べ物の選択、入手、加工・保存に関する知識をすべて完璧に備えていたとしてもふつうに食べるにはまだ遠い。食べ方についての背景も獲得していなければ、ふつうに食することはできないからである。たとえば誰も味噌汁をビーカーに入れようとは思わないだろうし、カレーをフォークですくって食べようとは思わないであろう。しかし私たちがなぜそのように味噌汁やカレーを食べないのかというと、それは私たちがこれら料理についての適切な食べ方を背景として身につけているからである。

食べ方についての規則は複雑で、ご飯には茶碗ちゃわんと箸、パスタにはフォークとスプーンというように、それぞれの料理にはそれに相応する道具があり、味噌汁はお椀わんを持ち上げて口をつけて吸い込む、パスタは数本のパスタをフォークに絡め、スプーンをその下部に寄せて落ちないようにして食べるというように、それぞれの料理にもそれに対応した食べ方がある。料理と道具の組み合わせ、料理と食べ方の組み合わせを逐一あげれば大変な量になることは想像にたやすいが、私たちはこれらすべてを背景として獲得しているからこそ、ふつうに食することができるのであり、もしそれがなければ私たちは食べ物を目の前に戸惑ってしまい、ふつうに食することができなくなる。

ここまでの議論で、私たちの何気ない食が実は膨大な知識に支えられていることは明らかであるが、慣習行動としての食をこれで説明し尽したわけではない。なぜなら食の背景は状況依存性が高く、状況に応じて変化する食の背景に対応できなければ、ふつうに食することはできないからである。

たとえば私たちはレストランに行くと、たいていの場合椅子に座って食事をする。そこに椅子とテーブルがあるのに床に座って食事をとろうとしたら、それはおかしなことであろう。しかしこれがピクニックであれば話は変わる。近くにベンチがあっても、芝生の上に座って食事をとることは別におかしなことではない。同様に、ふだんの食事でご飯一升を食べればそれはおかしなことであるが、そこが大食い大会であれば話は別で、むしろそれは賞賛される行為となる。食事は椅子に座ってとることが適当であるとか、ご飯一杯

が適量であるとかいったきまりは絶対的ではなく、文脈に応じて変化する相対的なものである。つまり私たちは、状況に応じて変化する食の背景を一瞬で読み取り、それに応じた食べ方を即興的に選択しているからこそ、ふつうに食べることができるのであり、逆にそれができなければふつうに食べることはできないのである。

ふつうに食べられるまでのプロセス

ふつうに食べるにはかくも複雑で高度な技術が必要とされるにもかかわらず、なぜ多くの人にとって食べることはありふれた日常なのだろう。なにかを食べようとするたびに、それに際して必要な知識をいちいち思い出しながら食べていたら、ふつうに食べることもなどとてもできない。もしそうであれば私たちの生活は食べることで埋め尽くされ、それ以外のことなどできなくなってしまうだろう。

食を支える知識を意識の中心に登らせることなく、背景として意識の彼岸で働かせ続けるためには、食の背景を深く身体に溶け込ませている必要がある。知っていることと、実際に行えることが異なるように、背景を身体に溶け込ませるためには、本を読んだり、誰かの食べ方を観察したりするだけでは不十分である。生まれたばかりの赤ん坊が、生まれ落ちた社会に共有されるルールを当たり前のこととして受け入れ、実践していくのと同じように、ふつうに食べるためにはその社会における食のあり方を当たり前のこととして一度受け入れ、それを反復実践することで身につけなければならない。

たとえば、私たちは箸渡しをしてはいけないこと、箸を使って食器を自分の近くに寄せてはいけないことを知っている。しかし私たちはこのような箸使いの前提を生まれたときから身体化していたわけではない。これらの前提は他者から教えられ、他者を模倣し、長い年月をかけて何度も繰り返すことによって初めて身に付く技術である。正しい箸の使い方を習得するまでには使い方を間違えて他人に注意をされ、気まずい思いをしたり、わずらわしさを感じたりすることもあっただろう。人によっては使い方を間違えて、顔から火が出るような恥ずかしい思いをする場合もあったかもしれない。ところがいったん箸使いにおけるこれらの前提が身体化され意識の彼岸に遠のくと、私たちはその

ような反復や失敗の歴史を忘れ、生まれたときからそれができていたような感覚を抱いてしまう。しかしその感覚こそが慣習行動を支える背景が身体化された証なのである。

磯野真穂著『なぜふつうに食べられないのか——拒食と過食の文化人類学』（春秋社、二〇一五年）

※本文中、出題に関係しない原本の後注と参考文献は省略した。



